唐丹文芸

唐丹短歌会

「さちぐさ」詠草

○お屠蘇酌み粋な囃や跳ね虎の勇みはだ舞う郷土（さと）の初売り　磯崎　彬

○人見知り覚えた孫にただ泣かれ愛し千里の峠ごえかな　上野ウタ子

○飛ぶことを忘れたごとく白鳥の河口に住みつき三年（みとせ）数うる　川原セイ

○節分のまめ投げつけて鬼面を見すかさん目の純なる子らは　大津秀子

○冬枯れのさつきに青い芽かすかにもいのち見出す今朝のよろこび　中嶋多喜子

○春はこぶボイル若布の湯気の香と浜の広場の人のさんざめき　須具美佐子

○参列者居住い正し読経の間両の手合わせ凛として聞く　環　あき

○農に生き農にくたびれ八十路坂スローとなりて老をなお知り　高橋昌子

○戻り寒霙（みぞれ）南天イナバウァー太陽にたれる玉宝石に見ゆ

○町内会集ふ度ごと老ひ添ふて痛み言ひ合ふ老ク顔ぶれ

○年老いば暖かき冬有難く暖冬の異変忘れ居る日日

○暁闇まで眠れぬうつつ生き越のドラマの断片浮かびては消ゆる

○里山のまんさく瑞らし陽を受けて春一番に黄花そよがす

○早池峰の草原駈ける子の写真仰げば遠く千の風かも

○ふるさとの川を辿りて水底に果てるる鮭の一途を思ふ

○岸壁に砕ける波のとどろきに歩を止め暫しその様を見む

---

⑦お堂のあったという桜峠の雷神宮であるが、記録では、文化十四（一八一七）年一八二年前とある。更に、雷神の丸石には、万延元（一八六〇）年庚申が刻まれていた。一三九年前、人柱の一六九年後。

この話をもとにした本（平成五年十一月一日発行）がある。

書名　千貫石溜堤悲話
おいし観音と呼ばれて
宮館秋彦　著

内容は、前記のおいし観音建立の由来から建立の経過が綴られ、般若心経の読経によって、おいしさんの霊を慰め続けた事。観音建立の後、おいしさんの加護が得られた事などで、一種の因果応報譚かと思うが、強い信仰心が感じとられる。

ただ、この本での遊郭で下働きをしていた。顔半面に痣はあるが気立ての良い働き者の漁師の娘さんとなっていて、人買い役の若者が嫁にと言って連れ出した。

また、普請奉行の名は川田勘祐となっている。

変わらないのは、銭千貫文である。当時の貨幣価値と現在はかなり違うが単純に一貫門一万円と換算して、一千万円である。現在では安いと思うが、当時の貨幣では二百五十両となる。

別に、この堤の礎石を仙台藩主綱村が価千貫門に匹敵、と称したとも言う。現在の我々から見れば、全く酷く、悲しい話である。

しかし、この事を唐丹の歴史とするのは、まだまだ調査が必要で、確かな事実がなければならない。今の所では、伝承の悲話としか言えない。

注・この稿の第一話は「おいし観音由来」「千貫おいし」から、第二話は「三浦寛平氏の唐丹史の周辺」から採録したものであることを付け加えておく。

なお、雷神石の揮毫は当山十五世無吼鉄鎚和尚による。